

# 視覚情報記号論レジメ 1

名古屋市立大学 2015 年度講義

久木田水生

## 1 記号論とは

記号論 (semiotics) とは記号 (sign, signal, symbol) の働きについての研究・理論である。一般に記号は何らかの意味・情報を有し、それを保存・伝達する機能を果たす。よって記号論は情報についての理論でもある。記号には言語的記号、視覚的記号 (標識など)、聴覚的記号 (サイレンなど)、触覚的記号 (点字など)、嗅覚的記号 (LP ガスの匂いなど) など様々なものが存在する。また記号には特定の目的をもって人為的に作られ使用されるものと、自然に生じるものがある。

およそすべての生物は何らかの記号を介して外界の情報を獲得し、それを利用して生存のために有利になるよう行動を決定する。従って記号はすべての生物にとって死活的な重要性を持つ。また特に人間は他の動物には見られないような高度な記号を作り使用する。そのためドイツの哲学者カッシーラー (1874-1945) は人間を「象徴的動物 (symbolic animal)」として特徴づける。

記号論の研究には、人文学的伝統と自然科学的伝統がある。前者においては、記号は文学、美術、建築、宗教、政治といった社会的な現象と関連付けられる。後者においては記号の働きが物理的、数学的、論理的、生物学的な観点から分析される。しかしこれらの二つの方法論的伝統は必ずしも明確に分けられるものではない。

## 2 現代的な記号論の二つの起源

記号についての研究は古くは古代ギリシャにまでさかのぼるが、現代的な記号論は 19 世紀の後半に、二つの異なる哲学者によって独立に始められた。一方はスイスの言語学者、哲学者であるフェルディナンド・ソシュール (1857-1913)、もう一方はアメリカの論理学者、哲学者であるチャールズ・サンダース・パース (1839-1914) である。ソシュールの研究はフランスの評論家、哲学者ロラン・バルト (1915-80) によって継承・発展させられ、文芸評論や文明批評の方法論として使われるようになる。一方、パースの研究はドイツやイギリスの論理学者たちに影響を与え、現代の記号論理学の発展に寄与した。またパースの理論は人工知能やロボット工学においてもしばしば応用されている。

## 3 人間にとっての記号の重要性

全ての動物は記号を利用して外界の情報を得ているが、人間は他の動物よりもはるかに複雑で高度な仕方で記号を利用することができる。例えば人間は有限個の記号のレパートリーから、記号同士を組み合わせることによって、単独の記号によって伝えることができる情報よりもはるかに多くの情報を伝達することができる。それだけではなく、人間は記号を創造したり鑑賞したりすること自体を目的とする活動に従事することもある。